

時差の関係で 18：25 成田出発の JL7 便は同日 18：15 にボストンのローガン空港に到着しました。雨に濡れたボストンのひんやりした空気に迎えられました。期待に胸膨らませていましたが、右も左も分からないものですから、ドキドキしながら降り立ちました。ホストである市沢正則氏がゲートで出迎えてくださり、ひとまず安堵感に浸りました。

市沢氏の車に乗って夜の高速を一時間ほど走りました。お宅はボストンの北東 45km のラウリーで、ボストンへの通勤圏内とのこと。職場への通勤の便利さのため、週の半分は、ラウリーのご自宅で一人暮らしをしておられます。ラウリーはすでにひっそりとしていました。市沢氏は、稲垣さんが日本語を教えておられたブラウン大学での同僚だった方です。稲垣さんを「稲垣先生、稲垣先生」と呼び、慕っておられる様子でした。稲垣さんも、何でも頼める親切な方、と言われます。ご自宅を宿として提供して下さり、訪問予定の施設とのネゴシエーター、また私たちのガイドとしてすべてのプランに同行して下さいます。私たちはなんの心配もないのです。一方、市沢氏は、後期高齢者の身元引受人（？）になられ、不安をお持ちだったかもしれません。



その晩にはワインと夜食を用意して下さいました。また、懐かしい故郷・伊達市の母校・稀府小学校の記念誌をテーブルに置いて、「稀府」を「何と読むか」と難題をまず、吹っかけられました。稲垣さんも私もわかりませんでした。メールで簡単な自己紹介を交わっていて、共に北海道出身ということもあり、初めてお会いしたのに、市沢氏の郷里への愛情と誇りの一端を知り、すぐに優しいお人柄を感じました。食事の前に「お祈りさせてください」と言われ、毎回お祈りして下さいました。稲垣さんと市沢さんは再会の喜びを語り合い、共通の友人の消息を尋ね合い、ワインについて、産地、銘柄などの区別、味わい方に関心を持たれていて、ワインを楽しく飲みました。私はニューイングランドの食卓の豊かさに目を凝らしました。美味しい、と言うと、「オーガニックにこだわっています」とのこと。夜中までお話が弾みました。

夜中を過ぎ、二階の寝室に引き上げました。そこは下のお嬢さんのお部屋だったそうです。姉妹ともに独立し、それぞれ別の場所で働いておられます。部屋の壁紙もベッドカバーも優しい感



じの花柄でした。枕元にはランプとお水。スライド式の窓が少し開いていて、レースのカーテンが揺れて、微風を感じます。また、大きなドレッサーがありました。その上にピンクや紫のトルコ桔梗やカーネーションの花がたっぷりと入っている花瓶が置いてありました。寝室にお花まで飾って下さって、私は感動してしまいました。パジャマに着替えて、ニューイングランドの最初の夜、安心し、感謝して眠れる夜の記念に、写真を撮らずにはいられませんでした。